

詩

蟹

晩冬の谷に 巨大なミサイルの発射音が鳴り響き
倒木の洞の中で冬眠していた蟹たちが 目覚める
そのミサイルが 誰によつて いつたい何のために
どこへ向かつて飛ばされたのか 何も知らないまま

蟹たちは洞を出ると 一糸乱れず 行進をはじめる
そして 山に隠れて今は見えない あの海辺を目指す
なぜその海辺でなければならないのか どうやつて
そこまでの行き方を学んだのか もはや忘れたまま

山を登りきる途中 赤き一群はハイウエイを横切る
高速で飛ばすタイヤに 蟹たちは次々と潰されていく
車たちが なぜかくも急いでいるのか 一体どこへ
そして何から逃げようとしているのか 知らぬまま

高
野
吾
朗

携帯電話の画面に目を奪われたまま すたすたと歩く
人間たちの群れに 踏みつぶされて息絶える蟹もいる
彼らの殻を粉碎した あの靴の持ち主たちが どんな
情報に飢え 何に怯えていたかなど 知らずに逝くのだ

山頂を越え 次の街の大通りを 蟹たちはひたすら進む
あちこちに見える人影 笑う者 泣く者 哀しげな顔
ここは本当に 今なお生きている街か それとも 実は
皆 ただの幽霊でしかないのか 蟹にわかるはずもない

森の中で お互いの体をむさぼるように絡み合う 一組の
裸の男女のすぐ脇を 生き残った蟹たちが一列で過ぎていく
この男女こそが 次なるアダムとイブなのか それとも単に
棄てられたマネキンでしかないのか 考えることもないまま

最終目的地の海辺には 「biological」 または 「chemical」と
書かれた金属製の容器が所狭しと並び 蟹たちの行く手を阻む
それが何のためのものなのか 今からどこかで使われるのか
それとも今から廃棄されるのか 蟹たちには一切関係がない

蟹たちがようやく 海水に浸るや否や 使い捨ての避妊具が
クラゲのようにならだに絡みつき 窒息ぐと静かに誘う
これらゴム製の漂流物の中に残存している 人間たちの体液が
いつたい何を暗示しているのか 死にゆく蟹たちは考えもしれない

最後まで残った蟹たちのからだから 大量の卵が海中へ放たれる
このあと卵はどうなるのか 産み終えた自分たちはどうなるのか
何も知らないまま 蟹たちは 洞の待つ谷へと 新たに舵を切る
あそこへ戻つて 一体どうなるというのか やはり知らないまま

クーデター

戦闘機ガ何度モ頭上ヲ低空飛行スルセイデ 一睡モデキヤシナイ

とうとう隣の国から 茶色い核爆弾が本当に飛んできました
そろそろ久しぶりに 黄色い大戦争が起きてしまいそうです
いよいよ国民全員に 青い徴兵制度が課せられるみたいです

妻を亡くしたひとりの男が ある日ふと思ひ立ち だらしない真っ裸の自らの体に 彼女の
の愛用のパンティと ブラジャーと ストッキングと スカートと コートと 彼女の
お気に入りのヒールと 口紅と サングラスと ブランドの鞄と 傘を全て身に着け 雨
降る街に 独り繰り出す 「わたし 最後までこの癌と遊ぶの」 が口癖だった妻 その言
いぐさを 街角を曲がるたびに 男が小声で真似る 「わたし 最後までこうやつて遊ぶの」

無数のカメラを前にして 黒い権力者が声高に話します

「かくたる国難においては 大なる白き人権のみが大事」「と同時に 小なる紫色の人権は 全て犠牲となるべき」

白いパンティに白いブラジャー 紫のストッキングに紫のスカート 黒いコートに黒いヒール 青い鞄に青い傘を身に着けて 妻を亡くしたばかりの男は 雨降る街の片隅に建つおんぼろビルの一室へと 独りそっと入る ようやく大人になれたような満足感とともに

声高に語りながら 権力者が一冊の赤い本を 聴衆にかざします

「諸君 坂口安吾の『墮落論』に 次のようない緑色の一節がある」

『必要ならば金閣寺をとりこわし 金色の火葬場をつくればよい』

その部屋にはスクリーンが一台あり 画面には声高に叫ぶ権力者が映つていて その演説を たくさんの男たちが黙つたままじつと見ていて どの男もみな 愛する妻を亡くした者ばかりで どの男もみな 生前の自分の妻とそっくりの格好で その男たちの前で 権力者が言い切る 「諸君 真の美とは わが国民にとつて必要なものだけを指し 逆に 我々にとつて必要なものは 全て醜く すぐにでも排除されて然るべきものばかりだ」

権力者のそのすぐ後ろには 彼の妻の 金色の微笑がありました
「わたし こうやつて遊ぶの」とでも言いたげな静かな口元でした

妻を亡くした男のひとりが 突然 「偽りの墮落だ」と叫び 真つ赤なトマトをスクリーンに投げつける すると他の男たちも 皆いつせいに 真つ赤なトマトをスクリーンに投げつける そして 「こんな金閣寺は要らぬ」「火葬場は我らの手で作る」の大合唱を起こす

戦闘機ガ何度モ頭上ヲ低空飛行スルセイデ 一睡モデキヤシナイ

こうしてとうとう 彼らの体の奥深くに眠っていた 黒い種子から
ようやく次々と 瑞々しくて美しい緑の芽が噴き出していきました
数日後に「首謀者全員極刑」で幕を閉じた あの黄色い未遂事件の
第一日目は 茶色い雨の降るなか かくも秘かに過ぎていきました

夢が発酵する時

往年の賑わいがまるで嘘のようない
この小さな過疎の街に
なおも残っているのは 白髪の老人たち十数名と
独りだけいまだに壮健な体つきの
無職の若者のみ

ここをいくら出ていきたくても 若者には出ていく金も勇気もない
老いきらばえた親のすねばかり ずっと安易にかじつてきただせいで
彼に今できることといえば 腐りゆく街の風景を罵倒することのみ

すると突然 この街に ひとりの若い女がふらりと訪ねてきた
彼女は空き家のひとつに目をつけ そこに独りで住みはじめた
老人たちは男も女も 自らを「芸術家」と呼ぶこの女を気味悪がつた

女はある日 メガホン片手に 街中のあらゆる通りを独り練り歩き

「わたしがこの街を 再び生き返らせてみせる」と派手に宣伝して回った
病的に見えるその蒼白な顔に見とれていたのは あの若者だけだった

彼女はその後 ただ街をうろつくばかりで 何もしようとはしなかつた
若者がどういうつもりかと尋ねてみると 女は彼の顔を優しくなでながら
「この街で最も退化した顔ね」と囁き 彼を自分の家へと招き入れた

何度も体を重ねあいながら 若者は 自分のからだの肉や内臓がまるで
聖なる生贊として 何者かに無残に食われているかのような あるいは
聖なる生贊を捧げられて それを存分に食らっているかのような気分でいた

「君がこの街を離れる時には 我も必ず同行する」 若者がそうせがむと
半裸の「芸術家」は冷ややかに笑いながら 「あなたに流浪は無理 だから
ずっとここにいなさい こうして免疫もつけてあげたのだから」と囁いた

やがて街中に 得体のしれぬ殺人的な伝染病が どつと蔓延しはじめた

病院のないこの街で 老人たちは次々に倒れ 自宅に臥せるようになつた
どの患者も 高熱にうなされながら 全身がくまなく透明になるのだった

どうしていいかわからぬまま 手をこまねいでいるだけの若者に向かつて

「芸術家」は 寝たきりの患者たちの家を一軒一軒 訪ねてみるよう促した
「そしてカメラで丁寧に撮影しなさい 苦悶にゆがむ 彼らの一瞬一瞬を」

若者が撮ってきた写真を丹念に眺めながら 女はさつそく分類を開始した

生死の境を行つたり来たりしている顔には
すでにほぼ死が確定したような顔写真には

「ただいま発酵中」と付箋を貼り
「腐敗」「廃棄」と赤字で大書した

「発酵中」の写真だけが大きく現像され その顔の持ち主の自宅前に飾られた
その透明さがいつしか評判となり 写真見たさに多くの観光客が訪れはじめた
街の経済は少しづつ潤いはじめ 「芸術家」のあの公約は 半ば現実となつた

街に新たにホテルが建ち 大手スーパーが建ち マンションまでが建ちはじめた
ようやく病院も建ち そしてその向こうには 小さな美術館までが建てられた
街中を彩つた病者の写真群は美術館に展示され 撮影者の若者は有名になつた

病院に収容された「発酵中」の者たちは そのまま「腐敗」へと転がり落ちるか
せつかく享受した街の利益を 先行きの暗い治療に すべて費やしてしまいかで
ひとり伝染病から無縁だった若者から見れば どこか生贊のようにさえ思われた

・・・と ここまで書き終えて わたしは床に就いた すると あの若者が
夢枕に立ち わたしに向かつて深々と礼を述べた 「あの写真撮影のおかげで
私はからも裕福で自由になつた あなたの助言のおかげだ どうもありがとう」

翌晩 わたしが再び床に就くと 再びあの若者が夢枕に立ち 今度は私を責めた
「このままだと街の住民は 私を除いて皆いなくなる 彼らには申し訳ないことをした
私も一緒に病んで逝きたい なぜその自由がないのか こうなつたのもおまえのせいだ」

今夜もあるの若者は わたしの夢にまた現れて わたしを誰かと勘違ひしたまま
こんなことを言うのだろう 「このままここから出ていくつもりか ならば

一緒にいていきたい ああどうして 独り旅立とうとするのだ まるで私の
夢枕から 自由気ままに退場しようとするかのように まるで
有機物が 静かに泡を立てながら 分解していくかのように「

サイド・エフェクト

鰻でも食べて精力をつけようかと思つていた とある猛暑日の午後
一人の老人がだしぬけに近づいてきて 「わたしは 未来の君だ

われらが聖なる書の中の一文を 今すぐここで 暗唱してみせよ」と
歯に衣着せぬ勢いで命じてきたので しばし呆然としていると

無表情のまま老人がやおら強烈な光線を発射し わたしの眼球は途端に暗転した

刺すような痛みによりやく目を覚ますと わたしの体はすでに寝たきりであり

両足は二本のオベリスクのごとく異常にむくみ 腹にはまるで妊婦のごとく水がたまり
背中の褥瘡はますます広がるばかりで あわてて痛み止めの麻薬を飲むと
すぐさま雄大な迷宮が目前に出現し その奥底から「役目アリ」という誰かの声が
不気味なごだまとなつて体中に響き渡り その副作用の吐き気にもはや耐え切れず

すぐに吐き気止めの薬を飲みこむと すかさずわたしの体は全身ぬるぬるとなり

食べ物なしでも半永久的に生き永らえる魚と化して ベッドの上をうねうねと這い回る環境の急激な変化のせいで 生殖器すらオスからメスへとすつかり様変わりし眠りさえ忘れてしまうほどで 夢を見たさに ナースコールを何度も押してはみたものの何の応答もなく 「助けて」と叫ぶ声は「死人ニモ」と即座に翻訳されてしまい

拳銃と防弾チョッキで完全に武装した医師団が ずらすらとわたしの病室に入ってきた 「次の自爆者はこの患者のようです」と言しながら わたしをどこかへと連れ去っていく インターナショナルゾーンから蟹のごとくつまみ出されるや 甲殻類となつたこの体は 星座のごとく碎け散り 罪なき市民を犠牲にする 渡り鳥もV字編隊を組んで飛び去る 鎌宮からの「世ニ果タスベキ」という最後のごだまで 聖なる文はここについに完結する

猛烈な便意に襲われて 寝たきりの体はそのことのみに持てる力を全て使い果たし 肛門からやつと何もかも出し切ると 今度は痰が絡んで呼吸はいつそう困難となり

「次は何が起るのか?」——ベッドを取り囲む親族たちに次なる薬を頼もうとすると 「家族を介護しないなんて恥」と言われ続けて 慣れない介護に今まさに疲労困憊中の鎌たちの群れはついに水中へとみな姿を消して わたしの子宮の奥深くではひつそりと

一本の灯台が暗黒の海上の果てに向かい 一筋の強烈な光線を懸命に投げかけており 照らし出された黒鳥のごとき船たちの側面に ほんのりと浮かんでは消える文字群は GAN (願? 眼? 龜? 雁?) と書いてあるのか それとも GUN ののか

小文字で cancer と書いてあるのか それとも 大文字の Cancer なのか 船団が (いつたい何のために?) ひたすら目指しているという「精霊たちの島」は

どうやら今なお 無人のままらしい だから そこにはもちろん 毛髪を失った者も 口内炎や口内乾燥や味覚障害に苦しむ者も まだいらないらしい

終わらない舞踏

先週ついに逝つてしまつた女が 長らく暮らしていた部屋の床の上に
彼女の最期を看取つた男が いま一枚ずつ丁寧に並べているのは
彼女がきちんと保存していた 病院の領収書たち

病で動かなくなつた両足を引きずりながら この部屋で這つていた彼女が
「わたしとまるでそつくり」と たえず口にしていた名画がある
アンドリュー・ワイエスの 「クリスティーナの世界」

這いまわつていたその影を あらためて追うかのごとく
一枚ずつ丁寧に並べられていく 真っ白な領収書たち
床に置かれるやいなや 書かれてある数字たちが揺れはじめる

女はこの部屋でよく 自分が最期にどんな臨終の言葉を吐くのか
夢想ばかりしていたものだが すべての予想はみな外れ
最後の昏睡状態に陥るその刹那 彼女は結局こう口にした

「金色のきれいな仏壇が いっぱい並んでる
そこにどうして こんなゴキブリがいるの
誰か来て 怖いよ 怖い」

部屋の床一面に ようやく領収書を全て並べ終えると
男はクリスティーナのように その場にぺたりと座り込んだ

窓からの光が床を金色に浸し 男の影はまるで一匹の虫のようで

かすかに漂うのはただ 草原の香りのみ

それは拒否の香り 自由の香り

涙の谷はすでにはるか遠く 部屋の全てはただ偶然の産物で

再び突風が 窓を激しくたたきはじめた

ただ がばつと 開けてしまいさえすればよいのだ

揺れる数字たちを 野生に戻したいというのなら

その昏睡から またも目覚めたいというのなら

捕虜の告白

「ある一定の環境のもとで ある任意の瞬間に

生きているあなたを変数X すでに死んでいるあなたを変数Y

と仮定した時 XとYの関係を表すグラフは まるで

アルファベットのMのごとき形となる そして この

XとYの関係を示す方程式は 常に次のように表される」

そう言い聞かされてずっと育ってきたが 今日 ようやくわたしは

この方程式の暗闇から 運よく隙を突き 逃亡することに成功した

逃げることに決めた理由 それは X が Y の体を いつも勝手に弄んでは 最終的に骨の髄まで食べ尽くすという慣例が もはや許せなかつたからだ

M 字のグラフの二次元世界が 後方に遠のいていく分だけ 様々な瞬間に Y が着てみせていた衣類たちの山の輪郭が ピラミッドのようになびくはじめる あの山のふもとに何かを置き忘れてきた気がするが もう引き返せはしない

しばらくしてわたしは 同じく逃亡者らしき女と偶然出会い すぐに恋に落ちた わたしに抱かれながら 自らが逃れてきた世界のありようを 女はこう説明した

「ある一定の環境のもとで ある任意の瞬間に

男として存在するあなたの磁力を X 女として存在するあなたの磁力を Y

そして X と Y の間の距離を Z と仮定した場合

X と Y の間に働いている磁気力は 次の方程式によつて常に求められる
(なお この方程式の中における M とは 比例定数である)

来る日も来る日も愛し合いながら 二人して果てなき逃避行を続けていた ある日 またまた馬上で出会つただけの 同じく逃亡者らしきひとりの男が

「あなたたちと一緒に逃げたい」「同行してもよいか」と 助けを求めてきた 極度の疲労と飢えに朦朧としながら 自らが逃れてきた世界の姿を 男はこう話した

「ある一定の国家において ある任意の瞬間に

『国民』としてあなたが燃やされた場合の 1モルあたりの熱エネルギーを X

『外人』としてあなたが燃やされた場合の 1モルあたりの熱エネルギーをY
国家全体が炎上した場合の 1モルあたりの熱エネルギーをZ と仮定した場合
 $X+Y$ の値とZとの差は あなた自身が何者であろうとも つねに一定である』

昼夜を問わず 森や砂漠や海辺や草原を 三人でとぼとぼ逃げていくうちに
次第に元気を取り戻してきたのか 男は 急にこんなことを言いだした
「私がもつとも理想的だと思う世界 そのありようは例えばこうだ
ある一定の環境のもと ある任意の瞬間における

あなたのそれまでの過去の総質量をX

あなたのそれ以降の未来の総質量をY と仮定した場合

XとYの関係は 以下のような方程式で 常に表すことができる

(なお この方程式の中における比例定数Mとは その環境の中に

『放射性炭素』という仮の姿で存在し続いている 神の量を示している)』

女がこの男に 強く惹かれはじめていることに うすうす気づいたわたしは
いさぎよく 彼女に別れを告げて たつた一人きりの旅をはじめるにした
女がわたしよりも彼を選んだ理由 それはどうやらわたしの言葉がどれもみな
初めて出会った時から今に至るまで ずっと彼女には偽物めいていたかららしい
「あの人は きっと自分の故郷に 自分の声帯を置き忘れてきてしまつたのよ』

わたしはその後まもなく わたしの故郷といまだに戦闘状態にある国の
国境警備隊によって強制逮捕され 捕虜として 収容所へと送られた
とはいえる 国にも 国家の根本たる方程式はやはり存在している
生きているXのわたしと 死んでいるYのわたしの間の関係性は
なんとわたしの故郷のあの方程式と まったく同じなのであつた

ああ この詩をいま眺めている読者よ
君は同性愛者か はたまた異性愛者か
國ある者か はたまた 国なき者か
いまだ生きる者か はたまたすでに死者か
未来に生きる者か はたまた過去にのみ生きるか

君ならではの数値を わたしを縛るこの方程式の
XとYに代入して いまの君の位置を探してはみないか

このわたしの呼びかけに 最初に答えてくれたのは ひとりの男であつた
顔はなぜかわたしにそつくりで その名のイニシャルはMであつた
彼の数値がXとYに代入されるその瞬間 声帶なきわたしのこの口は
はたして正しい答えを 彼に明瞭に伝えてあげられるだろうか

山頂へ

「-」としか
もはや言いようのない理由で
すつかり無人と化してしまつた
この街の はるか上空を

ロープウェイが二台
ぎしぎしと進む

先を行くロープウェイは 無人
あとを行くロープウェイには
あなた ただ独り
上へ上へ ゆらゆら
上へ上へ ごとごと
街の向こうは 森で
そのまま向こうは 海で
上空からどこを探しても
人の姿はどこにもなくて
あなたは再び
いつもの妄想へと沈みこむ

死んだ子供の複製を作るべく 新たに子を宿し その子に死んだ子と全く同じ人生を 無人
理やり歩ませて 最後には 全く同じ人間にしてしまうという 一人の女の人生が 再び
ちらつくのだ 先行する無人のロープウェイをじっと見つめる あなたのその目の前に

この妄想のせいで あなたは
いまだに気づけてはいないのだ
眼下の街の 一角に
廢材を黙々と集め続ける 一人の老人が
今なお 潜んでいることに
老人は 手当たり次第に

集めた木や石を 一つずつ

手繰り寄せては 一本の鑿だけで

ひたすら 一心不乱に

その表面を 鮫つていくのだ

古きその昔 誰もが心から讃えた

あの尊きお姿を またこの世に現すべく

上へ上へ ゆらゆら
上へ上へ ごとごと

森の奥では 別の老人が

好みの香りだけを ただ無心に求めて

食事も忘れたまま 独りさまよい続けており

鹿と出会えば 麝香を想い

倒木を見れば 沈香を想い

フットバスをまたひとつ 通過することに

白檀 肉桂 没薬 乳香のありかを 予感するのだ

しかし あなたは この狩人の

「歩く権利」にも やはり気づけないままである

上へ上へ ゆらゆら 上へ上へ ごとごと

ロープウエイの終着駅に 今ようやく 小さな火が灯る

夜風吹く 彼方の海岸には 人間の愚かさについての本を まるごと暗記して歩く 別の老人がひとりいる 人間の愚かさについて書かれた他の様々な本たちを 同じく暗記して

歩く別の旅人たちと どこかでひつそり出会うべく 老人はその長い旅路を なお淡々と
急ぐのだ しかしあなたは やはり気づかない 英雄以外は もはや見ないということか

さあ 終着駅はもうすぐだ

はたしてあの小さな火は 奪うものなのか
それとも 与えるものなのか

終着駅の目前で

先頭を行く ロープウエイの扉が
ふいに開いて そこから見えない何かが
すっと飛び降り 谷底へと 落ちていく

静寂 静寂

あなたは 恐怖と羨望の念に

少しずつ 引き裂かれていきながら

今 そのロープウエイを ゆっくりと降りるのだ

大晦日の大言壯語

違う 俺をよく見ろ 俺は虎だ 虎なのだ この小さな森にたつた独りきりで暮らす
人食い虎なのだ もう一年ほど 何も食べてない ただひたすらに 飢えた虎なのだ

物心についてからというもの 僕がずっと人間の来るのを待ち伏せし続けている この道を この一年の間に 通つた旅行者といえば いまだにたつた 三人だけだ

この森の東のはずれには 別の道があり 西のはずれには さらに別の道がある

三本の道はもともと一つの道で 森の南のはずれ辺りで なぜか三本に分かれているのだ

この森に伝わる古き伝説によれば これら三本の分かれ道のうち たつた一本だけが

「この世の中心」へとまっすぐ続く 唯一の通り道なのだという

森の南のはずれには どれが「正しい」分かれ道かを示す標識が 立つてはいるものの その謎めいた表示のせいで これまで多くの旅行者が 路上で頭を抱えざるをえなかつた

「右の道だと到達までに三年かかり 途中で広大な砂漠を たつた一人で歩かねばならぬ」

「左の道だと二年かかり 途中で荒れる大河を たつた一人で泳いで渡らねばならぬ」

「真ん中の道なら 一日で着くが 一年間 何も食べてない飢えた猛虎と遭遇せねばならぬ」

俺の住むこの道を今年初めて選んだ旅行者は 杖なしではもはや歩けぬほどの老人で 標識どころか残り二つの道も視野には全く入らなかつたらしく 直観的に俺の道を選んだ

なぜ俺はあいつを食わなかつたか それはあいつが あまりにも気味悪い奴だつたからだ 俺を見るなりあいつは 訳のわからぬ言葉の数々を 見境なく俺に投げつけてきやがつた

「わたしもあなたもすでに『死者』として 偉い人たちの計算に入つてゐるのです」
「非暴力がよくて 暴力が悪いだなんて 実は巧妙に作られた 真っ赤な嘘なのです」

「眞の友情というものは、たとえて言うなら、中心のない機械のようなものなのです」

俺が無視したままでいると、あいつはへらへら笑いながら、独りどぼとぼと去つていった。あの様子では、目的地までどうせ持つまい。途中で行き倒れるのは、目に見えていた。

あいつが路上に落としていった手帳には、こんな不気味な文章が繰り返し書かれてあつた。「ブレーキとアクセル踏み間違えて何が悪い。私は救急車だ。」

昨日やつてきた今年二人目の旅行者は、俺に会うなり歩みを止めて、いきなりこう言つた。「知つていますよ、この道こそが正解で、あとの二つは、どちらも間違いであることを」「だつて一年間、何も食べてない虎なんて、存在するはずがないじゃないですか」

この若者が言うには、俺は俺ではないのだそうだ。それに気づけぬ多くの旅行者たちは、残つた挙句、残りの道の一方を選び、旅路で死ぬか、到着地に絶望して自死するという

無数の旅行者の群れにあえて従わず、自分ただ独りだけがこの道を選んだことを。若者は、「運命的不平等」と呼び、「全ての人が平等になるのは死と暴力の前のみです」と笑つた。

俺はこいつもあえて食わずにおいた。なぜならこいつが、こんな奇妙な告白をしたからだ。「わたしの体には人工知能が埋め込まれているのです」機械の体など誰が食うものか

颯爽と走り去つていったあの若者がその後どうなつたか、もはや俺の知つたことではない。そして大晦日の今日、ようやく今年三人目の旅行者が、歩いてここまでやつてきた。

旅行者たちの独白を、べらべらと一方的に聞かされるのは、もはや我慢ならなかつたので

今度は俺の方から　日ごろの思いを　一方的にしやべりかけてやることにした
「あらゆる人間が　テロリストたりえて　あらゆる人間が　テロの犠牲者たりえることを
すっかり忘れてしまったところから　人間の『国民』化は始まつたのではなかろうか」

しかしこの旅行者は　ひたすら黙つたまま　俺の顔をただじつと眺めてばかりいたのだ
しかも奴は全裸であり　その体にはいくつもの　深い傷跡がくつきりと残つていたのだ
突然　奴は俺の頭に優しくキスをしやがつた　そして静かに微笑みながら　歩み去つた
今度こそ食つてやろうと思つていたのに　唚然としすぎたせいで　食いそびれてしまった

遠くで救急車のサイレンと　若々しい高笑いが響く中　俺は今なおこうして飢えている
この森の道の果てに　「この世の中心」があるなどと　一体　誰が言いはじめたのだ
なんて愚かな伝説だ　なんて愚かな年の瀬だ

炎について

今年いちばんの　厳冬の夕べ
女占い師のテントの中に　流れるジャズは
チャールズ・ミンガスの　「ピテカントロップス・エレクタス」
震えながら入つてくる　今夜の客の悩みごとは

「地球上の全てのものが まつたく信用できなくなつた」
「自分自身の心さえもが まつたく信頼できなくなつた」

女占い師が客の男に 「私の目をじつと見つめて」と 優しく促す

男の眼球の さらにその向こうにぼんやりと映つてるのは

台所のガスコンロの前に独りうずくまる 悲壮な彼自身の姿

一方 女占い師の眼球を じつと覗きこんでいるうちに

客の男にもそのさらに向こう側が 次第に見えてくる

それは 電話の受話器を握りしめたまま 黙つて いる占い師自身の姿

ガスコンロの火は全てきれいに消えており 外出の準備はすでに万端なのに
火が消えていることが まだ信じられず 男はコンロの前に座り込んだまま
もう何時間もの間 全てのバーナーを指先で ずっと撫でさすり続けている

女占い師が電話で話している相手は 何億光年も離れた惑星に独り暮らす恋人で
久しぶりに宇宙回線がつながつてくれたので 愛しいあの声を無性に聞きたくて
彼女は ずっと応答を待つて いるのに 耳に届いてくるのは ただ深遠な沈黙のみ

消えているはずの二つのガスバーナーのそれぞれに 男は幻の炎を見てしまふ

右側の赤い炎の揺らめきが 輪になつて座り込み 誰かを悼んで忍び泣く人々に見える
左側の青い炎の揺らめきが 誕生したばかりの命を取り囲み 涙して喜ぶ人々に見える

「私を愛してくれていますか」 — もはや我慢ができます 女占い師は受話器へ絶叫する
さらに長い沈黙のあと ようやく宇宙のはるか果てから 不明瞭なこだまがやつてくる
「タイヨウ? — いま『太陽』と言いましたか — 私が『太陽』?」 回線が切れる

女占い師が静かに目を閉じると　客の男もあらためて居住まいを正し　目を閉じる
彼女がおもむろに語りだす　「まずは鏡の前に　震えずに独り立てみるのです」
「そしてその鏡に触れてみるのです　そうすればあなた自身の冷たさがわかります」

翌朝　まだ夜が明けぬうちから　客だった男はいつもの仕事場へと静かに向かう
国家が強制的に囲い込んでしまったあの土地の　入り口近くの事務所に入ると
冷えたからだを保護するかのごとく　男は鎮圧部隊の制服をゆつくりと着る
延々と続く防壁のそばには　「囲い込み反対」を叫ぶ無数の市民たちが座り込んでいて
制服姿となつた男は　武器を片手に　今日も終日　その前に無言のまま立ちはだかる
彼の瞳の奥では　ガスコンロはまだ消えてはおらず　その炎はなぜかどれも冷たい

「もうこれ以上　忍耐できない」——怒りに満ちた市民のひとりが　男の同僚に殴りかかる
制服姿の同僚は簡単に「暴徒」を叫きのめし　「黙れ　直立猿人」と毒づき　せせら笑う
ガスコンロの男は急に　瀕死の市民と自分自身とが　引力によつて引かれ合うのを感じる
鎮圧部隊の隊員のひとりが　隣のガスコンロの男に向かつて　小声でぼそぼそと尋ねる
「どこにでもあるような平凡な大木が　たつた一本あるだけのこんな不毛な土地を
なぜ彼らはこうも守りたがるのか」　振り向いて防壁の中を見た隊員はまだ一人もいない
「こいつらは皆　あの木のことを　死んじまつた自分の最愛のひとの名前で呼ぶらしい」
別の隊員が　顔の緊張を一切ほぐすことなく　ぼそと呟く　「こいつらの人数分だけ
あの枯れ木には名前があるわけだ」　この隊員も　まだ実際にその木を見たことはない

次なる「直立猿人」が　今度はガスコンロの男に向かつて　やおら突進していく
「あんたは病人だ　なぜ自分の病気を　自ら引き受けようとはしないのか」——

そう叫ぶ「暴徒」の肩を 腹を 胸を 制服姿の男は自らの武器で 何度も殴り続ける

「反対」を叫ぶひとりの女が ガスコンロの男の腕をつかむ その顔があまりにも

女占い師にそつくりで 驚いたその瞬間 ようやく彼の中で コンロの炎が全て消える
「さあ外出だ」—誰かの声に誘われて 男が初めて 後ろを振り返る すると

遠方の大木のどの枯れ枝からも 死者が首から吊られており そのすぐ真後ろからは
巨大な真っ赤な太陽が 男に向かってすんずんと近づいてきており その炎は男の体に
まもなく触れてしまいそうで 全ての音がそこにあるようで しかも 無音のようだ

「他人をもつとも間近に思えるのは その人の訃報をはじめて知るその瞬間なのです」—
女占い師の別れのことばを思い出しながら 男ははじめて群衆の目前で 武器を手放した

妻と死

巷が英國のEU離脱で騒いでいる日曜の朝 あわてて病室に入ると 「まず息を整えて」
と 声にならぬ声で命じてくるから 「わかった」と言つて少しだけ落ち着くと 今度は
「わたしの両膝をゆつくり立てて」と言うので 冷たくむくみ切つたその両足をそつと曲
げてやると 仰向けて寝たままのか細いその喉から 獣のような粗いうめきがごろごろと
響いて その同じ口から「もう癌の話は一切しないで」という声がして 「わかった」と
言つて軽くその頬を撫でてやると 「エクレアがどうしても食べたい」と蚊の鳴くような

声で 今まで長いこと固く禁じられてきた食べ物のひとつを甘くねだるので あわてて買つて戻つてくると 飢えたジャングルの獸がまるで死肉に食いつくように いかにも旨そうに二口だけ食べて 残りをそのまま枕元に置き去りにし 「あなた食べて」と言うのですこしも減つていな腹の中へ無理やり全てを詰め込むと 反対側の枕元には『かもめのジヨナサン』の文庫本が置いてあつて 「読んでいたのか」と静かに問うと 少し間があつたあと 「そのサイズの本でもわたしにはもう重たすぎて持てない」と言うので 「それなら代わりに 僕が読むことにする」と答えると 肺の中の水を懸命に絞り出そうとするかのごとく 嘔吐を思わせるような表情で空咳を何度もしてから 「今日はもう帰らないで ここにずっといて」とさびしげに言うので 納棺の際に着せてやろうと思いつらきながら選んだスカイブルーのドレスのことを思い出しながら 「わかった」と言つて顔を枕元に近づけてやると 「いつ見ても情けない顔」と言いながら 片方の頬をびしやびしやと軽くたたいてくるので 「再婚はしない 約束する」と思わず言うと 「わたしにはもう全く関係のないことだから 好きなようにして」と言つて またも眉をひそめる

街のはるか向こうでは 恐竜たちが いまだ跋扈して いて
侍たちが まだ国を統治して おり 核爆弾は まだ一度も落ちてはおらず
癌が撲滅される日は いまだなお遠く

無音の雷鳴のごとき空氣の波が 部屋中を満たして おり ベッドにだらりと横たわるピンク色の病院服には 窓からの夕日がようやくうつすらと照りかえり その周りのいろいろな品々 例えば茶碗 ストロー 昔から使つている箸 小さめのスプーン 使い捨ての歯ブラシ 大人用おむつのセット タオル数枚たちなどが 日常から非日常へと はたしていま移るべきなのかどうか それぞれに最終決断を激しく迫られているかのようで 「物にはみな歴史があるのだな」と思わず口に 出してみると 「過去にはもうすっかり興味がなくなつた」と言うので 「もう誰にも会いたくはないのか」と尋ねると 「ええ つま

りあなたは『選ばれし唯一の人』と言つてつっこりと笑い また激しく咳き込むので
「今 夫のこの姿を見てどう思うか」と自らを指しながら問うと 「大江健三郎の書いた『個人的な体験』っていう小説の主人公みたい」と答えるので 「それはいつたいどんな小説なのか」と尋ねると 「そんなことをいちいち説明している時間はもうなさそう」と言いながら 今度は自分自身の痩せこけた顔を弱弱しく指さし 「この顔を見てどう思う」と問うてくるので 「畏敬の念しか感じない」と答えると 「いまここで あなたの手で殺されたい」と急に涙声で言うので 凍りついたかのようになだ顔をじつと見つめて
いると 「逝った先にいったい何が待つていいのか 考えただけでわくわくしてくる」と
言い 今度はいきなり笑顔になるので たまらなくなり 赤みを増す窓辺の風景に目を向
けると 一羽のカモメが仲間の群れを無視したまま 急降下と急上昇を繰り返しながらず
つと戯れており 「ジヨナサン」と心中で呼びかけると 「なあに」と答えながら真向
いの壁をまたも弱弱しく指さすので ふと見ると そこに貼つてある常緑樹の若葉たちの
写真が 夕日のせいか 紅葉した落葉樹の葉のようで その神々しさが 睡魔を誘い込む

街のはるか向こうでは 恐竜たちがようやく全て死に絶えて
侍たちの国もついに崩壊し 核爆弾もすでに何度も落ち
大量殺戮兵器は もはや数えられぬほどの量で
癌が撲滅される日も いよいよ目前のはずで

「エアコンを操作して 室温をちょっとだけあげてほしいんですけど」というか細い声で
突然の眠りからようやく目覚めると 「そんな小さなお願ひ事のためにこそ ここにずっと
いてもらつているわけだから しつかりしてください」と言うので 「室温をあげさえ
すれば 生の方向へとまた後戻りしてくれるのか」と愚かな冗談を言うと 「逝く瞬間を見逃さないでほしいからこそ ここにずっといてもらつているわけだから しつかりしてください」と 声にならぬ声で言うので 「こんなことを言いあえる夫婦になろうとは思

わなかつた」とあきれ顔で答えると「全ては病気のおかげ」と言つて静かに目を閉じるので、「おいジョナサン」と小声で呼びかけると病室の電話が鳴り受話器を挙げれば電話線の向こうにあるのは光か闇かそれとも「離脱」という言葉に一喜一憂してばかりの国かさっぱりわからないままずっと受話器を取らぬままにしていると「ご夕食をお持ちしました」という看護師の声が扉の向こうから聞こえベッドの中で閉じられていたはずの両眼が虚空へと独り消えゆく鳥の眼のごとく再び静かに開かれて「まだまだあなたの思い通りにはいきません」と微笑むその口元に恐怖する女のエロスが浮かぶ

再び街の果てから恐竜たちの咆哮が轟き

核爆弾なき血みどろの武闘に歓喜する侍たちの高笑いまでもが

同時にこだましてくるかのようで思わず耳を塞ぐと

スカイブルーのドレスが誰にも着られぬまま独りひらひらと天空を舞う

水中花

昔の兵隊たちみたいに俺にも「慰安婦」が必要だ――

そんな軽々しい気持ちで

いまこの男はわたしをわがものにしようとしている

この男はいつもこの部屋の外へとわたしを連れ出したがる

自分が「所有物」として——しかし それだけは許さない
この部屋の中でなら 何でも言うとおりにしてあげるけれど

今日もまた 金額分の性行為のあと ベッドに裸のわたしを残し
男は この部屋にたつた一つしかない 窓の前に立つと
平凡な夜の街並みを 苦虫を噛み潰した顔でじっと眺めている

ベッドのわたしの体からは 今日もまた 見知らぬ女が
するりと抜け出し 虚空にふわりと漂いはじめる
今日の女は 数珠を手にしたまま 何やらぶつぶつと呟いている

「黒々と広がる大河——周囲はジャングルばかり——川辺に立つわたしの白髪は乱れ——
腰は曲がり——皺だらけの顔は蒼白——鼻の両穴には透明なチューブ——いつもなら杖が
必要不可欠なのだが——今日はわたしのひとり娘が 老いたこの体を支えてくれている」

「おまえが部屋の外に 一步も出たがらないのなら 逆にこの室内に
外の世界をまるごと 持ち込んでしまえばいいだけの話だ」——男はそう言い放つと
窓を開け 息を一度大きく吐き それからおもむろに 世界全体を吸い込みはじめる

川辺の老女は数珠を手にしたまま 顔全体を川に浸けると 黒く淀んだ泥水を静かに
口に含む ごくりと飲み干すと顔を挙げ 今度は自分の娘に向かってぽつりと語る
「どうやら戦争は終わつたらしいが わたしの戦争はこれからはじまるのだ」

窓の外の世界が 破片となつて少しづつ 男の肺の中へと吸い込まれるたびに
人間同士の違い 建物同士の違い 車同士の違い 言語同士の違いは全て失われ

単に「人間」「建物」「車」「言語」といった総称のみが 残されるばかりとなる

老女は語る——「毎日役所へと足を運んだ——『ご主人の配属先が南方のあそこなら
ご帰国はきっと早いはずです』——担当者のこの話に、わたしはすっかり安心したものだ
やつとあの人気が帰つてくるのだ——これでわたしにもようやく 春が来るのだ 春が」

窓の外の世界を全て 問題なく吸い込み終えると 男は再び窓をきつちりと閉め
わたしに無理やり媚薬をかがせようとするかのごとく 大げさなゲップをひとつする
この男ほど 下り坂を独りで降りていく孤独に 耐えられそうにない者はあるまい

老女はなお語る——「同じ戦地から無事帰国した元兵士がいると聞き 訪ねてみた——
『お宅のご主人もあそこに?』——『ええ』——『あそこは敵兵がみな親切でしたから
少しの取り調べだけで帰国を許してくれました——ご主人もきっともうすぐですよ』」

話し終えた老女が突然 頭全体を肩のあたりまで 大河の中にずぶりと入れる
ごくり ごくりと 泥水を飲み下し続ける音が ジャングル中に広がっていく
「川底に眠っているわたしの父を 救い出すためです」と 娘が代わつて説明する

ずっと閉じたままだつた わたしの額の第三の眼が ここでようやくぱつと開いて
わたし自身に問いかける——「おまえがこの部屋から 一步も出ることを許されないのは
この国が初潮前のおまえを『生き神』として正式に選んだからではなかつたのか」

娘がなお語る——「母が顔を水に浸けているのは 涙を隠すためでもあるのです——
兵士の妻がこれしきのことで 人前で涙を見せるなど ただの恥さらしですから」——
老女が飲む泥水の量と 彼女がこぼす涙の量がほぼ同じせいで 川の姿は不变のままだ

男がまたもや 裸のわたしを抱こうと近寄ってきた まさにその瞬間

巨大な音を立てて 彼の体は粉々に爆発し 外の世界の全ては微粒子の海となり
部屋の中に満ちあふれる そしてわたしは 海の底に咲く 一輪の欲望の花となる

ようやく顔を挙げた老女の濡れた唇は まるでぬめぬめと光る蛭のようで
どんな汚いものも呴えこみ ありつたけの唾液ですぐさま透明にしてしまった
その唇がゆっくりとささやく――「ここでいいのだ 勝利はないが 負けもないのだ」

いま 額の第三の眼に映し出されているのは 空虚と化した窓の外の世界の底辺を
ずっとひとりぼっちのまま ただぼんやりと漂う わたし自身の姿ばかりである
脳も臓器も子宮も退化した 蛭のごとき肉体 そんなわたしを はるか上方から

眺めおろしつつ わたしの帰りをじつと待つて あの濡れた顔はいつたい誰だ

付記 以下の四つの詩編以外はすべて、これまで未発表であつた作品ばかりである。転載を快く許可して下さつた『ミテ』の編集人・

新井高子氏に、ここであらためて深く感謝申し上げる。

「終わらない舞踏」（初出→詩と批評『ミテ』第一三七号、二〇十六年十二月）

「大晦日の大言壯語」（初出→『ミテ』第一三八号、二〇十七年三月）

「妻と死」（初出→『ミテ』第一三六号、二〇十六年九月）

「水中花」（初出→『ミテ』第一三九号、二〇十七年六月）